

三國干渉、ロシアの侵略：独立自尊に賭けた日本人の戦いはやまず

Watanabe Toshio ● 拓殖大学総長
渡辺利夫

PROFILE 昭和十四年（一九三九）、山梨県甲府市生まれ。慶應義塾大学卒業、同大学院修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授を経て現職。著書に、「新脱亜論」（文藝春秋）、「アジアを救った近代日本史論義」（PHP研究所）など多数。

なったのでしょうか。残念ながら、そうはなりませんでした。

そこで日清戦争前後の極東アジアの地政学的な状況を振り返ることにしましょう。

地図を見れば一目瞭然ですが、朝鮮半島はユーラシア大陸から日本に向かって突き出た一本の鉤のような半島です。そこが敵対勢力の手に置かれることは、日本にとって重大な危機を意味します。

日清戦争での日本の勝利で、朝鮮の清国への従属は断たれ、自主独立の国となった。ところが……。朝鮮は、三國干渉を呑んだ日本を軽蔑し、弱体化した清国も見限つて、あろうことかロシアに靡いた。一方、ロシアは朝鮮を蹂躪し、清国を取り込み、満洲を不法占拠する。理想が潰えた日本人はしかし、新たな試練に挑んでゆく。

「独立自尊」が不可欠と訴えたが……

日清戦争で清国に勝利した日本。朝鮮は日本の願い通り、清国との従属関係を断ち切つ

て名目上は「独立自主の国」となります。

しかし、果たしてこの日清戦争での日本軍の砲声は、川上操六などが思い描いたような「清や朝鮮の覚醒を促す警鐘」となり、「東亜連携による列強への対抗」の道を開くことに



福沢諭吉（『未来をひらく 福澤諭吉展』<慶應義塾>より転載）

福沢諭吉が明治十五年（一八八二）に「朝鮮の交際を論ず」という一文を『時事新報』に書いています。

「万に「も此国土を挙げて之を西洋人の手に授るが如き大變に際したらば如何。恰も隣

家を焼て自家の類焼を招くに異ならず。西人東に迫るの勢は火の蔓延するが如し。隣家の焼亡豈忍れざる可けんや。故に我日本国が支那の形勢を憂ひ又朝鮮の国事に干渉するは、敢て事を好むに非ず、日本自国の類焼を予防

するものと知る可し」

当時の日本人の危機意識を非常に端的に言い表わしています。

福沢の問題意識の核心は、「日本国の独立自尊」でした。国家の独立自尊のためには「身独立」や「一家独立」が不可欠であり、個人にいたるまでが文明化せねばならないと考えたのです。岩倉遣欧使節団が、日本にとって屈辱的な不平等条約を改正すべく意を尽くしても全く取り合ってもらえなかった姿を見て、福沢は「今の世界は西洋列強によって「文明国」と「野蛮国」に色分けされていて、文明国にならなければ対等で平等な国際関係が結べない」と痛感します。それゆえ福沢は、明治の日本人に向かって必死に啓蒙活動を行ない、同時に朝鮮や清国に対してもその「文明化」を強く求めたのです。

この問題意識は、当時の日本の中では広く共有されたものでした。しかし、清や朝鮮の因循で固陋な姿勢を崩すには至りませんでした。とりわけ強大な中国からの圧迫を受けざるをえなかった朝鮮は、どうにも身動きが難しい、鬱屈した歴史を経てきました。十四世紀末に李氏朝鮮を建国した李成桂は、「小を以て大に事ふるは保国の道也」として、徹底的な事大主義を採ります。それゆえ、大国に可愛が



「下関講和談判」（永地秀太画、聖徳記念絵画館蔵）卓の奥、障子を背にして伊藤博文、その左に陸奥宗光。伊藤の対面には李鴻章の姿がある

られ保護されて、初めて独自の朝鮮王朝が成り立つという考え方が根深く染みつき、福沢流の「独立自尊」の考えはなかなか理解されなかったのです。

理不尽な干渉に燃え立った日本人たち

さらに、朝鮮に「日本恃むに足らず」と思わせる事態が起ります。日本が三国干渉の屈辱を余儀なくされたことでした。

日清戦争に勝利した日本は、下関の春帆楼で日清講和条約を結びます(日本側全権代表・伊藤博文・陸奥宗光、清側全権代表・李鴻章・李經方)。条約では、第一条で朝鮮を独立自主の国にして清との宗属関係を廃棄することが確認されたほか、遼東半島・台湾・澎湖諸島の割譲、賠償金二億両の支払い、清国が列強と結んだ不平等条約を日本にも適用すること、などが決められました。このうちの遼東半島の割譲について、ロシア、フランス、ドイツから異議が唱えられたのです(三国干渉)。

実は、清との戦争に勝利した場合、列強からの干渉を招くであろうことは、陸奥宗光らが早くから想定していたことでした。そこで陸奥は、まず清と戦う大義名分を明確にしようとしてしました。

この点で決定的だったのは、甲申政変(開化派の金玉均等によるクーデターが失敗した事件)の後に日清間で結ばれた天津条約(明治十八年(一八八五))でした。この条約では、朝鮮で変乱があつて派兵する時は両国が互いに通知し合う(行文知照)ことが定められました。清国が出兵した時は日本も出兵できる論拠をはつきりと得たのです。これは大きな成果でした。陸奥も次のように回顧しています。

「将来如何なる場合においても同国(朝鮮)へ軍隊を派出せんとするときは、先ず日本政府に行文知照せざるべからずとの條款を具する条約を締結したるは、彼にありては殆ど一大打撃を加えられたるものにして、従来清国が唱え居たる属邦論の論理はこれがために大いにその力を減殺せしことは一点の疑いを存せず」(蹇蹇録)

さらに、陸奥は戦争の「主動者」はあくまで清であり、日本は「被動者」だという立場を取ろうとします。そのために陸奥は、日清戦争の直前、東学党の乱が起きて日清両国が出兵した後に、清国に対して、共に朝鮮の内政改革に当たろうと提案したのでした。もちろん、これが清国に蹴られるのは想定内のことでした。列強に対して、日本は朝鮮の改革を実現しようとした。だが、清国が拒否した。だから戦

人で長時間話し込む中で、干渉受諾やむなしの結論となります。

最終的に、三国干渉を受けてから、日本が清への遼東半島返還を宣言するまで要した時間は十八日です。どうせ負けるなら、決断は早い方がいい。その分、激しい悔恨の思いを胸に秘め他日を期す。日本は、国力と軍事力においてまだ欠けるところがある。どんな苦勞をしてでも、軍備増強を図るべしとの決意を固めます。まさに「臥薪嘗胆」でした。

清国から得た巨額の賠償金の九割を、軍事情に充てました。国民の租税負担率も五割を超え、海軍費も明治二十八年(一八九五)には



李鴻章(写真彩色:山下敦史)



ロシアのコサック兵(写真提供:PPS通信社)。日清戦争後、ロシアは満洲、朝鮮への圧迫を強めた

千三百万円だったものが、同二十九年には三千八百万円、同三十年には七千六百万円と著しい速度で膨れ上がっていきます。しかし、国民は堪えました。列強の脅威と理不尽を目の当たりにして、日本人は燃え盛っていたのです。その上、この時代の日本の指導者たちは、幕末以来の修羅場を潜ってきた武士たちです。から、研ぎ澄まされた鋭角的な判断力と剛毅の氣概に満ちていました。

東亞提携の夢は破れ、日露戦争へ

ところが、この日本の姿を見た朝鮮の支配者は、単に「易々と列強に屈服した」としか見ません。そして日本を軽蔑し、弱体化した清を見限り、より強い大国ロシアに靡く親露派が俄然勢いを増していったのです。

実は朝鮮は、大国である清に卑屈なまでに「事え」つつ、しかし、心のどこかでは清を侮蔑していたように思われます。「清を建國した満洲族は、もともと北の蛮族(北狄)であり、自分たち朝鮮人こそが中華文明の正統な後継者だ」という自負が心の中で膨らんでいたのではないのでしょうか。もちろん、相手が強いよりはそんなことはおくびにも出さないものの、本心では軽蔑していた。清が弱体化するとこ

日本は奮闘した… 英女性旅行家が見た 朝鮮改革

日清戦争開戦直前の明治二十七年（一八九四）七月、日本の後押しを受けた大院君が政治の実権を握ると、改革派で親日派でもある金弘集内閣が成立した（甲午改革）。政変で排除された閔妃派などの頑強な抵抗で、改革はいくつもの壁にぶつかったが、それでも朝鮮国内の状況は大きく変わっていく。

ちょうどこの時期、一八九四年から一八九七年（明治二十年）まで、イギリス人女性旅行家のイザベラ・バードが朝鮮を四度にわたって旅行し、『朝鮮紀行』（原著は一九〇五年発行。邦訳、講談社学術文庫）を著わしている。イザベラ・バードの眼に、この時期の朝鮮はどのようなに映ったのであろうか。

まず特筆すべきは、改革の成果を高く評価していることである。イザベラ・バードはこう書く。

「日本が日清戦争を戦った目的がどこにあるかは日本がたいへんなエネルギーをもって改革事業に取りかかったこと、そして新体制を導入すべく日本が主張した提案は特権と大権の核心に切りこんで身分社会に大変革を起こし、国王の地位を「給料をもらうロボット」に落ちぶれさせたものの、日本がなみなみならぬ能力を発揮して編みだした要求は、簡単に自然な行政改革の体裁を示していたことを指摘すればこと足りる。わたしは日本が徹頭徹尾誠意をもって奮闘したと信じる」

彼女が挙げるのは、本質的に政治体制が腐敗していた清と朝鮮の同盟関係の断絶、貴族と平民との区別の（少なくとも書類上での）廃止、奴隸制度などの廃止、残忍な処罰や拷問の廃止、教育制度・軍隊・警察の改革、科擧の廃止と司法改革、商業の自由化、郵便制度の確立、国家財政の健全化、税金制度改革によって官僚による「搾取」を大幅に減らしたと、などとある。



イザベラ・バードは、一八九四年のソウルの印象を「城内ソウルを描写するのは勘弁していただきたいところである。北京を見るまでわたしはソウルこそこの世でいちばん不潔な町だと思っていたし、紹興へ行くまではソウルの悪臭こそこの世でいちばんひどいにおいだと考えていたのであるから」とまで書いていた。しかし、三年後に「ごみや汚物は役所の雇った掃除夫が市内から除去し、不潔さでならぶものなかつたソウルは、いまや極東でいちばん清潔な都市に変わろうとしている」とする。当時の市長・李采淵と税関長マクレヴィ・ブラウンの功績だというが、大きく変わる朝鮮の姿が目に見えよう。

また、李朝末期の官僚階級は「公認の吸血鬼」だと、その腐敗と不正、狡猾と搾取とたかりの体質を辛辣に批判するが、日本は、暴政をほしいままにしてきた官僚に対して、「庶民にも権利はあり、尊ばねばならぬ」という新しい理論を導入したと評価した。



邦訳版の表紙と、文中に挿入された当時のソウルの写真 参考文献：イザベラ・バード『朝鮮紀行』（時岡敏子訳、講談社学術文庫）

つさとこれを見限り、平然とロシアに急接近したのはそのためです。

日清戦争後の日本は、朝鮮の近代化を目指していました。それまで朝鮮政府を牛耳ってきた閔妃派を排除して、親日派の金弘集や朴泳孝らの内閣による改革を画策・実行しようとしたのです。しかし、この動きは親露派の強い抵抗に直面します。さらに、日本に排除された閔妃派もロシアと結び、クーデターを敢行。内閣から親日派を駆逐します。日本の願いはまたもや踏み躪られました。

この時期に駐韓公使となった三浦梧村は、かつて閔妃に追放された大院君の擁立を図ります。明治二十八年十月、大院君は親日派官僚や韓国訓練隊（日本が指導した韓国軍隊）、日本人壮士を引き連れて王宮に侵入。その混乱の中で閔妃が殺害されます。

こうして再び親日派の金弘集が内閣を組織して改革を進めますが、固陋な「衛正斥邪」の思想に凝り固まった守旧派はこれに猛反発し、「義兵闘争」が発生します。翌二十九年二月には、この混乱の隙をついて朝鮮の親露派官僚が国王をロシア公使館に移し、ロシア公使館の中で親露政権を樹立。金弘集ら朝鮮内政改革を進めるべき改革派首脳たちを惨殺してしまいました。

このように朝鮮では自主独立の芽のことがとくが潰され、改革派の有力者も次々と倒されて、打ち続く混乱の中、遂にはロシアに蹂躪されてしまふのです。

一方の清国も、ロシアに取り込まれていきます。明治二十九年には、李鴻章がサンクトペテルブルクを訪問して「露清密約」を結びます。「日本がロシア・朝鮮・清に侵攻した場合、露清両国は相互に軍事援助する」「戦争の際には、清の港湾はロシア海軍に開放される」「シベリア鉄道からつながる東清鉄道を清領内に敷設する権利をロシアに認める（後に東清鉄道と南満洲を縦貫する東三省鉄道をつなげることも認める）」などの内容でした。清にとってあまりに屈辱的、日本にとって著しい脅威となる密約でした。

さらに明治三十一年（一八九八）には、ロシアは三国干渉で日本から清に還付させた遼東半島を自ら租借（二十五年間）します。明治三十三年（一九〇〇）に義和団事件が起きると、ロシアはその鎮圧と称して派兵した八千余の兵力を撤兵させず、満洲の兵力を増強し、不法に占拠します。満洲ではロシア人による清国人の迫害虐殺も発生しました。かくして、日本、清、朝鮮が各々に近代化を果たし、提携して列強に対抗しようという

日本の夢は空しいものとなりました。むしろ逆にロシアの侵略を加速する事態を招き、日本は日露戦争へと突き進んでいくのです。

その日露戦争で日本は、世界最大の陸軍国といわれたロシアを破りました。その歴史的記憶があまりに強いために、日本が「独立自尊」という理想をかけて戦った日清戦争が、当時の日本にとって伸るか反るかの大勝負だったことが忘れられがちです。しかし実際に、日清戦争こそ日本の「独立自尊」を達成しうるか否かの決定的な分かれ道だったと、私には思えてなりません。

西欧列強の圧迫を受けていた当時の東アジアにおいて、「独立自尊」は厳しい課題でした。独立自尊のアジアが手を携えて対抗する、という日本人の理想も、清国や朝鮮には理解されず、苦闘と挫折の連続でした。朝鮮の「独立」に賭けた福沢諭吉が、清と朝鮮両国のあまりの固陋なる思想と行動に絶望して「悪友を親しむ者は、共に悪名を免かるべからず。我は心に於て亜細亜東方の悪友を謝絶するものなり」とまで書かざるをえなかったことに、東アジアの困難さが象徴的に表われています。それゆえにこそ、死力を尽くして「独立自尊」に賭けた日本人の魂は、現在を生きる私たちにも多くのことを語りかけているのです。